

平成
26
年度

詩吟
と
詩舞
の
集い

詩
文
集

くがつとおか
九月十日

すがわらのみちざね
菅原道真(承和十二年) 九〇三年
(八四五) 延喜三年

きよ ▶ 去年の
ねん ▶ 今夜
こん ▶ 清涼に
や ▶ 侍す

しゅう ▶ 秋思の
し ▶ 詩篇
へん ▶ 独り
ひと ▶ 断腸

おん ▶ 恩賜の
し ▶ 御衣
ぎよ ▶ 今此に
い ▶ 在り

ほう ▶ 捧持して
じ ▶ 毎日
まい ▶ 余香を
にち ▶ 捧す

〔本文〕

九月十日

去年今夜侍清涼

秋思詩篇獨斷腸

恩賜御衣今在此

捧持毎日拜餘香

【通釈】 昨年の今夜は、重陽の後朝(九月十日)の宴に召され、宮中の清涼殿で、他の人々とともに帝のそばにはべり、「秋思」という勅題を賜わって詩を作ったが自分の詩はこのほか帝のお氣に召しておほめをいただいたのであった。しかしそのことも、いまはかえって身も切られるような悲しい思い出となってしまった。その時ごほうびとされていた帝の御衣は今もここに大切にお持ちしているが、日ごとささげもつては、残り香を拝し、ありがたくなつかしく帝のことをおしたい申し上げているのである。

不識庵機山を撃つうの凶ずに題だいす

頼山陽らいさんよう
(安永九年一七八〇年)
(天保三年一八三二年)

鞭べん声せい肅しゆく肅しゆく夜よる河かわを過わたる
 遺恨いこんなり十年じゅうねん一劍いっけんを磨みがき
 流星りゅうせい光底こうてい長蛇ちやうだを逸いっす
 暁あかつきに見みる千兵せんべいの大牙たいがを擁ようするを

【本文】

題不識庵撃機山圖

鞭聲肅肅夜過河 曉見千兵擁大牙

遺恨十年磨一劍 流星光底逸長蛇

【通釈】馬にあてる鞭むちの音もひそやかに、上杉勢は夜陰に乗じてひそかに河を渡った。夜明け方、川霧の晴れ間から上杉の大軍が、大将旗を押し立てて、武田勢の前に陣取っているのが見える。謙信にとつて返す返すも残念なことは、長い年月の鍛練で磨いた腕前もかひなく、流れ星のきらめく一瞬の差で、強敵信玄を逃がしてしまったことだ。

涼州詞

王

翰

(盛唐 六八七? - 七二六?)

葡萄の美酒夜光の杯
 飲欲琵琶馬上催
 醉臥沙場君莫笑
 古來征戰幾人回

【本文】

涼州詞

葡萄美酒夜光杯

欲飲琵琶馬上催

醉臥沙場君莫笑

古來征戰幾人回

【通釈】 味のよいぶどう酒を、白玉のさかずきに酌んで飲もうとすると、馬上で琵琶をかきならして興を添えるものがある。酔いつぶれて砂漠の戦場に倒れ伏しても、君よ、どうか笑わないでくれたまえ。昔から、戦いに出た者が、いったい幾人無事に帰れたであろうか。

中庸 ちゆう しよう

元田東野 もと だ とう や
(文政元年、明治二十四年
 一八一八、一八九一)

勇力ゆうりよくの男児だんじは勇力ゆうりよくに斃たおれ

文明ぶんめいの才子さいしは文明ぶんめいに酔よう

君きみに勸すすむ須すべからく中庸ちゆうようを扱えらび去さるべし

天下てんかの万機ばんき一誠いっせいに帰きす

〔本文〕

中庸

勇力男児斃勇力

文明才子酔文明

勸君須擇中庸去

天下萬機歸一誠

〔通釈〕

人間の常として勇力にのみ頼っているものは遂にはその為に身を亡ぼす。また、外面の華麗にあこがれる者は内実のない人となりかねない。君に勧めたいことは、すべてのことは皆誠をもって達成されるのであるから、常に不偏中正の道を選び、それによって行動する、ということである。

夜墨水を下るよるぼくすいくだ

服部南郭はつとりなんかく
(天和三年 一六八三)
宝曆九年 一七五九)

金竜山畔きんりゅうさんばん 江月浮こうげつう 江搖こうゆら 月湧つきわ 金竜流きんりゅうなが
 扁舟住へんしゅうとど 天水てんみず の如ごと し 兩岸りょうがん の秋風しゅうふう 二州にしゅう を下くだる

【本文】

夜下墨水

金龍山畔江月浮

江搖月湧金龍流

扁舟不住天如水

兩岸秋風下二州

【通釈】 金竜山のほとり、隅田川の水面に明るい月の影が浮かんでいる。江水のゆらぐにつれ、月の光が波の中から湧き出てきて、さながら金の竜が走ってゆくようである。小舟も軽やかに走り、夜空は水のように清く澄み、右の岸も左の岸もいずれも秋の気が溢れているが、その武州・総州の二州の境を下ってゆく。

菊きく花か

白はく

居易きよ

(中唐、七七二、八四六)

一いち夜や新しん霜そう瓦かわらに著ついて軽かろし

芭蕉ばしょうは新あらたに折おれて敗荷はいかは傾かたむく

寒かんに耐たうるは唯ただ東籬とうりの菊きくのみ有ありて

金粟きんぞくの花はなは開ひらいて曉更あかつきさらに清きよし

〔本文〕

菊 花

一夜新霜著レ瓦輕

芭蕉新折敗荷傾

耐レ寒唯 有ニ東籬菊

金粟花開曉更清

〔通釈〕 一夜、はじめておりた霜が、うつすらとかわらの上にあり、芭蕉も折れて、枯れた蓮も傾いている。こんな秋の気配の中で、寒さに耐えているのは、ただ東のかきねの菊の花だけである。黄色い花をつけている菊は、ただでさえ清らかな明け方を、いつそう清らかなものにしていく。

夜墨水を下る

服部南郭はつとりなんかく
(天和三年)
宝曆九年
(一六八三)
一七五九

金竜山畔 江月浮 かぶ
 江搖ぎ 月湧いて 金竜流る
 扁舟住 ならず 天水の如し
 兩岸の 秋風二州を下る

【本文】

夜下墨水

金龍山畔 江月浮
 扁舟不住 天如水

江搖月湧 金龍流
 兩岸秋風 下二州

【通釈】 金竜山のほとり、隅田川の水面に明るい月の影が浮かんでいる。江水のゆらぐにつれ、月の光が波の中から湧き出てきて、さながら金の竜が走ってゆくようである。小舟も軽やかに走り、夜空は水のように清く澄み、右の岸も左の岸もいずれも秋の気が溢れているが、その武州・総州の二州の境を下ってゆく。

海^{かい}南^{なん}行^{こう}細^{ほそ}川^{かわ}頼^{より}之^{ゆき}
(元徳元年、一三一九—明徳三年、一三九二)人^{じん}生^{せい}五^ご十^{じゅう}功^{こう}無^なきを愧^はず花^か木^{ぼく}春^{はる}過^すぎて夏^{なつ}已^{すで}に中^{なか}なり満^{まん}室^{しつ}の蒼^{そう}蠅^{よう}掃^{はら}えども去^さり難^{がた}し起^たつて禪^{ぜん}榻^{とう}を尋^{たず}ねて清^{せい}風^{ふう}に臥^がせん

〔本文〕

海^{かい}南^{なん}行^{こう}人^{じん}生^{せい}五^ご十^{じゅう}愧^{くわい}無^む功^{こう}花^か木^{ぼく}春^{はる}過^す夏^{なつ}已^{すで}中^{なか}満^{まん}室^{しつ}蒼^{そう}蠅^{よう}掃^{はら}難^{がた}去^さ起^た尋^{たず}禪^{ぜん}榻^{とう}臥^が清^{せい}風^{ふう}

〔通釈〕

すでに人生五十年を過ぎたのに向に功績がないのは実に恥かしい。今は花の咲く春も過ぎ、夏もすでに半ばになっている。部屋の中を青蠅が追い払ってもうるさく飛びまわるように、つまらない人たちの動きがうるさい。このような所にいつまでもいないで座禅の椅子のある禅堂を訪れ、涼しい風に吹かれながらそこで横になりたいものだ。

ふるさとの山やま

ふるさとの『山』に向むひひて

言いふうことことななし

ふるさとの山は ありがたきかな

石いし
川かわ
啄たく
木ぎ

ふるさとの『山』に向むひひて

言いふうことことななし

ふるさとの山は ありがたきかな

赤馬あかまが関せきを過すぐ

伊形いがた靈れい雨う（延享二年〜天明七年）
（一七四五〜一七八七）

長風ちようふう浪なみを破やぶって一いっばん帆かえ還る

碧海へきかい遙はるかに環めぐる赤馬あかまが関せき

三十六灘さんじゅうろくだん行ゆくくゆく尽つきんと欲ほつす

天辺てんべん始はじめて見みる鎮西ちんせいの山やま

〔本文〕

過す赤馬關

長風破やぶ浪一帆還

碧海遙環赤馬關

三十六灘行欲盡

天邊始見鎮西山

〔通釈〕

はるか彼方から吹きよせる風を受けて、わが帆船は万里の波を破って帰るのである。瀬戸内海の海原を、多くの岬や島々をめぐって、はるばる赤馬が関へと航路を取る。多くの早瀬などの難所を乗り越え、やがて波の静かなところへ出ようとすると、空の彼方に始めて、故郷九州の山々が見えるのであった。

河内路上かわちろじょう菊池溪琴きくちけい こん
(寛政十一年、明治十四年)
(一七九九、一八八一)南朝なんちようの古木こぼく寒霏かんび鎖とざす六百ろっぴやくの春秋しゆんじゆう一夢いちむ非ひなり幾度いくたび天てんに問とえども天答てんこたえず金剛こんごう山下さんか暮ぼ雲うん帰かえる

【本文】

河内路上

南朝古木鎖寒霏

六百春秋一夢非

幾度問天天不答

金剛山下暮雲歸

【通釈】

南朝の頃からあったと思われる古木も淋しく夕もやに包まれている。思えば楠公が南朝に忠節を尽して戦ったときから、六百年の歳月が夢のように過ぎ去り、当時をしのぶべくもない。幾度か天に向つて尋ねたが天も當時を語らず、金剛山の楠公の史跡はいたずらに夕暮れの雲が去来しているのみである。

花朝かちょう澱江でんこうを下くだる

藤井ふじい竹外ちくがい
(文化四年、慶応二年、一八〇七、一八六六)

桃とう花か水みず暖あたかにして輕舟けいしゅうをおく送る

背はい指し孤鴻ここう没ぼつせんと欲ほつするの頭ほどり

雪ゆきは白しろし比良山ひらさんの一角いっかく

春風しゅんふう猶な未いまだ江州ごうしゅうに到いたらず

【本文】

花朝下澱江

桃花水暖送輕舟

背指孤鴻欲沒頭

雪白比良山一角

春風猶未到江州

【通釈】

桃の花が咲き、淀川は水もぬるんで量を増し、自分の乗る舟をかるやかにおし流してくれる。

ふと振りかえって指さしてみた。一羽のおおとりが消え去ろうとするあたりを。比良の山の一角にはまだ雪が白く残っている。春風はまだ近江の方にまで吹いていないのであろう。

峨眉山月の歌 がびさんげつ うた

李 り

白 はく
(七盛唐一七六二)

峨眉山月半輪秋
 影入平羌江水流
 夜清溪を發して三峽に向かう
 君を思えども見えず渝州を下る

よるせいけい
はつ
さんきよう
さんきよう
む
かげ
へいきようこうすい
い
なが
きみ
おも
み
み
ゆしゆう
くだ
る

【本文】

峨眉山月歌

峨眉山月半輪秋

影入平羌江水流

夜發清溪向三峽

思君不見下渝州

【通釈】 峨眉山に、半輪の月がかかっている。その月の光は、平羌の江水を明るく映し出し、水は静かに流れてゆく。私はこの夜清溪を出発して三峽に向かったのであったが、ここに来てはじめて月を見ることができたのである。このあたり、山がつらなり特別の時刻でなければ、太陽や月の見えないところというが、舟が下るにつれて、やがて半輪の月も隠れてしまつて、そのまま空しく渝州を通り過ぎたのであった。

静夜思

李

白はく
(盛唐一七六二)

牀しょう前ぜん月げつ光こうをを看みる
 頭こうべをを举あげてを山さん月げつをを望のぞみ

疑うたごうらくは是これ地上ちじょうの霜しもかと
 頭こうべをを低たれてを故郷こきょうをを思おもう

【本文】

静夜思

牀前看月光

舉頭望山月

疑是地上霜

低頭思故郷

【通釈】 寝台の前に、月の光が明るく白くさしこんでいる。余りの明るさに霜ではないかと疑ったがそれは月の光なのであった。頭を挙げてみれば、山上に明月が皎皎と輝いている。異郷にあって、このよ
うな美しい月を見ると、とりわけ故郷を思ふ情にひかされて感慨に沈んでしまうのである。

漫述

佐久間象山（文化八年—元治元年）

謗そしる者ものは 汝なんじの謗そしるに任まかす
 天てん公こう本もと 我われを 知しる

嗤わろう者ものは 汝なんじの嗤わろうに任まかす
 他た人にんの 知しるを 覓もとめず

【本文】

漫述

謗者任汝謗

天公本知我

嗤者任汝嗤

不覓他人知

【通釈】 謗る者はぞんぶんに謗るがよい。あざわらう者は思いきりあざわらうがよい。謗るも嗤うも君たちの勝手にさせておこう。天の神だけは、わたしの私心のないことを知っている筈であるから、他人に理解してもらおうなどとは思わないのである。

不識庵機山を撃つうの凶ずに題だいす

頼山陽さんよう
(安永九年)
(一七八〇年)
(天保三年)
(一八三二年)

鞭べん声せい肅しゆく肅しゆく夜よる河かわを過わたる
 遺恨いこんなり十年じゅうねん一劍いっけんを磨みがき
 流星りゅうせい光底こうてい長蛇ちやうだを逸いっす
 暁あかつきに見みる千兵せんべいの大牙たいがを擁ようするを

【本文】

題不識庵撃機山圖

鞭聲肅肅夜過河 曉見千兵擁大牙

遺恨十年磨一劍 流星光底逸長蛇

【通釈】馬にあてる鞭むちの音もひそやかに、上杉勢は夜陰に乗じてひそかに河を渡った。夜明け方、川霧の晴れ間から上杉の大軍が、大将旗を押し立てて、武田勢の前に陣取っているのが見える。謙信にとつて返す返すも残念なことは、長い年月の鍛練で磨いた腕前もかいたくなく、流れ星のきらめく一瞬の差で、強敵信玄を逃がしてしまったことだ。

白菊しらぎくの花はなをよめる

心こゝろあてに—
折をらばや折をらむ』

初霜はつしもの—
置をきまどはせる—

心こゝろあてに—
折をらばや折をらむ』

初霜はつしもの—
置をきまどはせる—

凡河内おほこゝろ躬み恒つね

白菊しらぎくの花はな』

白菊しらぎくの花はな』

富士ふじ晴はれてよし—曇くもりてもよし—富と士しの山—もとの姿すがたは—かはらざりけり—晴はれてよし—曇くもりてもよし—富と士しの山—もとの姿すがたは—かはらざりけり—山やま
岡おか
鐵てつ
舟しゅう

富士山ふじさん石川丈山いしかわじょうざん

(天正十一年) 一五六七(二年)

仙せん客かく来きたり遊あそぶ雲うん外がいの巔いただき
 神しん竜りょう棲すみ老お洞どう中ちゆうの淵ふち
 雪ゆきは紈がん素その如ごとく煙けむりは柄えの如ごとし
 白はく扇せん倒さかしまに懸かかる東とう海かいの天てん

【本文】

富士山

仙客來遊雲外巔

神龍棲老洞中淵

雪如紈素煙如柄

白扇倒懸東海天

【通釈】雲の上に高くそびえる富士山のいただきには仙人が来て遊ぶといわれ、また洞中の深い淵には神竜が昔から棲んでいるともいわれている。頂きに積もる雪は扇の白絹のごとく、頂きよりたちのぼる煙は扇の柄のごとく、その雄姿はさながら白扇をさかさまにして東海の天にかけたようである。

不^ふ二^じひとつ

蕪村

不^ふ二^じひとつ埋^{うず}みのこして若^わ葉^はかな埋^{うず}みのこして若^わ葉^はかな

【読み方】ふじひとつ うずみのこして わか

ばかな

【季語】「若葉」初夏。

【語釈】○不二—富士山。不尽などとも書く。

【通釈】頂に残雪のみえる孤峰富士の山麓

は、一面若葉に覆われて、富士ひとつ

つを埋み残している。

【参考】明和六年（一七六九）の作。若葉の

勢いを量としてとらえ、新緑の壮大

な景を詠みこんでいる。蕪村自身も

自信があり、富士山の自画賛に「東

海万公（江戸高輪東禅寺僧万庵原

資）句 青天八朶玉芙蓉」に並べ、

「東成蕪村句」として掲出する。蕪

村生前から代表作として名高い。

【作者】前出。

【出典】あけ鳥

分け入っても

山^{さん}
頭^{とう}
火^か

分け入っても
分け入っても
分け入っても

分け入っても

青[△]い山[△]

分け入っても

青[△]い山[△]

山中さんちゆうの月つき

我われは愛あいす 山さん中ちゆうの月つき

幽ゆう独どくの人ひとを 憐あわれむが為ために

我わが心こころ本もと月つきの如ごとく

心こころと月つきと 両ふたつながら相あ照てし

真しん

山民さんみん
(二二七四頃在世)

炯けい然ぜんとして 疎そ林りんに掛かかる

流り光ゆうこう 衣い襟きんに散さんず

月つきも亦また我わが心こころの如ごとく

清せい夜や 長とこしなえに相あ尋いたねん

春日山懐古
かす が さん かい こ

大槻磐溪
おお つき ばん けい
(享和元年、明治十一年、一八〇一—一八七八)

春 日 山 頭 晚 霞 鎖 す
かす が さん とう ばん か とご
 憐 れ む 君 が 独 り 能 州 の 月 を 賦 して
あわ きみ ひと のうしゅう つき ふ

平 安 城 外 の 花 を 詠 ぜ ざ り し を
へい あん じょう がい はな えい
 驂 駟 嘶 罷 有 鳴 鴉 有 り
か りゅう いなな や めい ああ

〔本文〕

春日山懐古

春日山頭鎖晚霞
 憐君獨賦能州月

驂駟嘶罷有鳴鴉
 不詠平安城外花

〔通釈〕

越後の春日山は空しく晚霞でとざされ、往年の駿馬の鳴き声も今は聞く由もなくただ鳥が鳴くばかりである。謙信が全国制覇を志して能登にまで遠征し、その月に一詩を賦したものの、天下を平定して平安城下の花を詠ずるの初志を果す事が出来なかつたのは誠に残念な事であった。

山やまを看みる

新にい島じま

襄じょう
(天保十四年、明治十三年)
(一八四二、一八九〇)

山やまを看みれば高たかきこと巍ぎぎ巍ぎぎたり

海うみを觀みれば闊ひろきこと洋よう洋ようたり

味あじわい得えたり造ぞう化かの妙みょう

小しょう心しん少すこしく発はつ揚ようす

【本文】

看レ山

看レ山高巍巍

觀レ海闊洋洋

味得造化妙

小心少發揚

【通釈】 山は高く高く聳え立って見え、海ははるかに広々と大きく望まれる。この大自然を眺めていると、はかり知れない天地創造主の力が、つくづく感じとれる。こうして意気地を失ないかけた自分の気持を少し奮い立たせることが出来たのである。

ふるさとの山やま

ふるさとの山▲に向▽ひ▽て

言▽ふ▽こ▽と▽な▽し

ふるさとの山▲は ありがたき▽かな

石い川がわ
啄た木ぼく

ふるさとの山▲に向▽ひ▽て

言▽ふ▽こ▽と▽な▽し

ふるさとの山▲は ありがたき▽かな

自じ詠しょう

杉浦重剛すぎうらじゆうこう
 (安政二年—大正十三年)
 (一八五五—一九二四)

岳がくに登のぼりて 天下てんかを小しょうとし
 其それ 山さん上じょうの山やまを奈いかんせん

自みずから 誇ほこる意いき氣きの豪ごうなるを
 之これを 仰あおげば 一いっ層そう高たかし

【本文】

自詠

登登嶽嶽小小天下天下
 其其奈奈山山上上山山

自誇意氣豪
 仰仰之之一一層層高高

【通釈】 高い山に登ると、一望のもとに見わたせる下界に、天下などまことに小さなものだと、自ら意気の盛んなことを誇るものである。しかし更に上を見れば、一層高い山が立ちふさがるように聳えている。いったい、これをどうしたらよいのであろうか。仰げば仰ぐほど、ひとときわ高く聳えているのである。世の中にこれでよいということはない、満足してしまっただけはそれで終りなのである。

山行同志さんこうどうしに示すしめ

草場くさば佩川はいせん
(天明八年、慶応三年、一七八八、一八六七)

路みちは羊腸ようちように入いって石苔滑せきたいなめらかなり

風かぜは鞋底あいていより雲くもを掃はらうて廻めぐる

山やまに登のぼるは恰あたかも書生しよせいの業ぎように似にたり

一いっ歩ぽ歩ほ高たこうして光景こうけい開ひらく

【本文】

山行示同志

路入羊腸滑石苔

風從鞋底掃雲廻

登山恰似書生業

一步歩高光景開

【通釈】

山路は斜めにどこまでも続いていて、石にむした苔も滑らかである。風は草鞋の下から雲を払って吹きめぐる。山に登るということは、あたかも書生が勉学に励むことと同じである。勉学に励めば励む程、見識が開けてくるように、一步一步高く登るにつれて、新しく視界が開けてくるのである。

城しろ山やま

西にし道どう仙せん
(天保七年、大正二年、一八三六、一九一三)

孤こ軍ぐん奮ふん闘とう 困かこみを破やぶつて還かえる

一いっ百びやくの里り程てい壘るい壁へきのかん間かん

吾わが劍けんは已すでに摧おれ 吾わが馬うまは斃たおる

秋しゅう風ふう 骨ほねを埋うずむ故郷こきやうの山やま

〔本文〕

城山

孤軍奮闘破圍還

一百里程壘壁間

吾劍已摧吾馬斃

秋風埋骨故郷山

〔通釈〕 かつて盛んな勢いも、ついに力衰え、孤立無援の中を敵の厚い囲みを破つて、故郷鹿兒島の城山に還つて来た。敵の攻める長い道のりを、いくつものとりでを通り抜けてきたのである。我が剣はすでに折れて使えものにならず、我が馬も傷ついてたおれてしまった。もうこの上は、この秋風の中で、骨を故郷の山に埋めるばかりである。

山さん行こう杜と牧ぼく
(晚唐 八〇三—八五二)

遠とおく寒かん山さんに上のほれば石せつ径けい斜ななめなり
 車くるまを停とどめて坐そぞろに愛あいす楓ふうりん林りんの晚くれ

白はく雲うん生しょうずる処ところ人家じんか有あり
 霜そう葉ようは二月にがつの花はなよりも紅くれないなり

【本文】

山 行

遠上寒山石径斜

白雲生處有人家

停車坐愛楓林晚

霜葉紅於二月花

【通釈】 はるばると晩秋のもの寂しい山を登って行くと、小石まじりの道は斜めにどこまでも続いていく。白い雲がわきあがっているあたりに、人家が見える。車をとめて、そのままうつとりとかえでの林の夕ぐれの美しさにみとれていたが、霜にうたれて色づいた葉は夕陽に照らされて、いちだんと赤く、二月に咲くもの花よりも、もっと赤く美しかった。

静夜思

李

白はく
(盛唐一七六二)

牀しょう前ぜん月げつ光こうをを看みる
 頭こうべをを举あげてを山さん月げつをを望のぞみ
 静夜思

疑うたごうらくは是これ地上ちじょうの霜しもかと
 頭こうべをを低たれてを故郷こきょうをを思おもう
 疑是地上霜
 低頭思故郷

【本文】

牀前看月光
舉頭望山月

疑是地上霜
低頭思故郷

【通釈】 寝台の前に、月の光が明るく白くさしこんでいる。余りの明るさに霜ではないかと疑ったがそれは月の光なのであった。頭を挙げてみれば、山上に明月が皎皎と輝いている。異郷にあって、このよ
うな美しい月を見ると、とりわけ故郷を思ふ情にひかされて感慨に沈んでしまうのである。

不識庵機山を撃つうの凶ずに題だいす

頼山陽らいさんよう
(安永九年)
(一七八〇年)
(天保三年)
(一八三二年)

鞭べん声せい肅しゆく肅しゆく夜よる河かわを過わたる
 遺恨いこんなり十年じゅうねん一劍いっけんを磨みがき
 流星りゅうせい光底こうてい長蛇ちやうだを逸いっす
 暁あかつきに見みる千兵せんべいの大牙たいがを擁ようするを

【本文】

題不識庵撃機山圖

鞭聲肅肅夜過河 曉見千兵擁大牙

遺恨十年磨一劍 流星光底逸長蛇

【通釈】馬にあてる鞭むちの音もひそやかに、上杉勢は夜陰に乗じてひそかに河を渡った。夜明け方、川霧の晴れ間から上杉の大軍が、大将旗を押し立てて、武田勢の前に陣取っているのが見える。謙信にとつて返す返すも残念なことは、長い年月の鍛練で磨いた腕前もかいたなく、流れ星のきらめく一瞬の差で、強敵信玄を逃がしてしまったことだ。

田原坂 (西南の役陣中作)

佐佐友房 (安政元年、明治十九年
一八五四、一九〇六)

雨は戦袍を撲ち風沙を捲く
江^{こう}山^{ざん}十^{じゅう}里^り両^{りょう}三^{さん}家^か
壯^{そう}凶^と一^{いつ}蹶^{けつ}無^む窮^{きゆう}の恨^{うら}み
馬^{うま}を断^{だん}橋^{きょう}に立^たてて落^{らつ}花^かを看^みる

【本文】 田原坂 (西南役陣中作)

雨撲ニ戦袍ニ風捲レ沙
江山十里兩三家
壯圖一蹶無窮恨
立ニ馬断橋ニ看ニ落花

【通釈】 雨は激しく軍服をうちつけるように降り、風は強く吹き、砂を巻き上げている。この田原坂は見渡すかぎりの山河の中に、人家が二三軒あるだけである。壮大な計画が挫折し、かえって無限の恨みが残った。今、馬を断橋に止めて、静かに花の散るのを見ているのである。

山さん行こう杜と牧ぼく
(晚唐 八〇三—八五二)

遠とおく寒かん山さんに上のほれば石せつ径けい斜ななめなり
 車くるまを停とどめて坐そぞろに愛あいす楓ふうりん林の晚くれ

白はく雲うん生しょうずる処ところ人家じんか有あり
 霜そう葉ようは二月にの花はなよりも紅くれないなり

【本文】

山 行

遠上寒山石径斜

白雲生處有人家

停車坐愛楓林晚

霜葉紅於二月花

【通釈】 はるばると晩秋のもの寂しい山を登って行くと、小石まじりの道は斜めにどこまでも続いていく。白い雲がわきあがっているあたりに、人家が見える。車をとめて、そのままうつとりとかえでの林の夕ぐれの美しさにみとれていたが、霜にうたれて色づいた葉は夕陽に照らされて、いちだんと赤く、二月に咲くもの花よりも、もっと赤く美しかった。

楓橋夜泊
ふうきょうやばく

張
ちやう

繼
けい
(中唐七五六頃在世)

102

月落^{つきお}ち^お烏啼^{からすな}いて^な霜^{しも}天^{てん}に^に満^みつ
 姑蘇^{こそ}城^{じょう}外^{がい}の^の寒^{かん}山^{さん}寺^じ
 夜^や半^{はん}の^の鐘^{しょう}声^{せい}客^{かく}船^{せん}に^に到^{いた}る
 江^{こう}楓^{ふう}漁^{ぎよ}火^か愁^{しゆう}眠^{みん}に^に対^{たい}す

【本文】

楓橋夜泊

月落烏啼霜滿天

江楓漁火對愁眠

姑蘇城外寒山寺

夜半鐘聲到客船

【通釈】

月はもう西に沈み、烏の鳴く声が聞こえ、空には霜のおりる気配が満ちあふれて、寒さがきびしい。川岸の楓や、漁り火のあかりが、点々と、寝そびれた目にうつる。なかなか寝つかれずにいると姑蘇の町はずれの寒山寺からであろうか、夜半を告げる鐘の音がこの船まで聞こえてきた。

朗詠

新田

興こう
(明治二十四年—昭和五十二年)

声せい 氣き 堂どう 堂どう 志こころざし 尋たずぬべし 高こう 低てい 長ちよう 短たん 又また 淵えん 深しん
 朗ろう 吟ぎん す 今こん 古こ の 先せん 賢けん の 賦ふ 一いっ 片ぺん 』 千せん 秋しゅう 天てん 地ち の 心こころ

【本文】

朗詠

聲氣堂堂志可尋
朗吟今古先賢賦高低長短又淵深
一片千秋天地心

【通釈】 声も氣力も、まことに堂々としていて、その志がどこにあるかがよくわかる。高くまた低く、長く声を引くかと思えば、短く切ることもあり、その曲節は、まことに奥深いものがある。こうして、古今のすぐれた先輩の人々の詩歌を朗吟するとき、われわれは、そのすぐれた人々と一体になり、永遠に変わることはない、また無限にひろがる天地の純粹な正氣と化するのである。

笛ふえを聞きく

服はつ部とり南なん郭かく
(天和三年、宝曆九年、一六八三、一七五九)

二に月がつの梅ばい花か洛らく城じょうの東ひがし

落おちんと欲ほつして落おちず軽けい風ふうを待まつ

君きみ聞きかずや風ふう前ぜん笛てき裏りの情じょう

翩へん翩べん吹ふき満みつ洛らく陽よう城じょう

吹ふく者ものは知しらず聴きく者ものの恨うらみ

三さん弄ろう都すべて断だん腸ちようの声こえと作なる

非常之變ひじょうのへんに立到たちいたり申し候もうまう

吉よし田だ松しょう陰いん

親お思もふオ

こころにまさる

親おごころ

親お思もふ

けキョウふウの音おとづれ

何なにときくらん

こころにまさる

親おごころ

けおふの音おとづれ

何なにときくらん

辞世

吉田松陰
（天保元年、安政六年）
 （一八三〇—一八五九）

吾今 国の爲に死す
 悠悠 天地の事
 死すとも 君親に負かず
 鑑照は 明神に在り

〔本文〕

辭世

吾今爲國死 死不負君親
 悠悠天地事 鑑照在明神

〔通釈〕

わたしは今、お国のために死んでいく。これまでの私の行為は、私心から発したものでないの、死にのぞんでも、天子、両親にそむいてはいない。悠久な天地の間に展開される人間の多くの行為は、神のみが知るものであり、私のこの忠誠も神が知ってくれるものであり、それゆえにこそ今従容として死につくのである。

出塞行しゅつさいこう王おう昌齡しやうれい(盛唐 六九八?—七五五?)

白草原頭はくそうげんとう 京師けいし 望のぞ 望めば
 秋しゅう 天てん 曠野こうや 行人こうじん 絶た 絶ゆ
 馬首ばしゅ 東來とうらい 知し 知る 是こ 是れ 誰たれ 誰ぞ
 黄こう 河が 水みづ 流なが 流れて 尽つ 尽くる 時とき 無な 無し

【本文】

出塞行

白草原頭望京師

黃河水流無盡時

秋天曠野行人絶

馬首東來知是誰

【通釈】 遠く辺境の守備に赴く途中、草の白く枯れた平原に立って、遠く都を望むのであるが、ただ滔滔と、東へ流れて尽きることのない、黄河の水が見えるばかりである。秋の空は澄みわたり、その下にはてしなく広がる原野には、旅人の影も絶えてしまっていたが、そのとき唯一人、はるか彼方から馬上東へとこちらに向って来る者があるが、あれは一体だれだろう。都に帰れるとは羨しいかぎりである。

老木桜
おいきざくら

或る山寺に
あ　やまてら

うつろ木の
う　ろ　木　の　一　なん
ひ　と　つ

有ける
あ　り

一茶

今にも枯る、
い　ま　か

ばかりなるが
ば　か　り　な　る　が

さすが春の
さ　す　が　は　る　の

しるしにや
し　る　し　に　や

三ツ四ツふたつ
み　よ　つ　ふ　た　つ

つぼみけるを
つ　ぼ　み　け　る　を

浅^{あさ}まし^の

老木桜^や

翌^{あす}が^日に

倒^{たお}る

ま^でも

花^{はな}の^咲く^哉

倒^{たお}る

ま^でも

花^{はな}の^咲く^哉

半はん夜や

良りょう

寛かん

(宝曆七年、天保二年)
一七五七、一八三一

首こうべを回めぐらせば
五十ご有じゅう余ゆう年ねん

人じん間かんの是ぜ非ひは一いち夢むの中うち

山房さんぼう五ご月がつ黄こう梅ばいの雨あめ

半はん夜や蕭しょう蕭しょう虚きよ窓そうに灑そそぐ

【本文】

半 夜

回レ首レ五十有餘年

人間是非一夢中

山房五月黄梅雨

半夜蕭蕭灑灑虚窓

【通釈】 くり返つて見れば私の人生も既に五十余年が過ぎてしまった。過ぎ去つた自分も含めた人間社会のことは、是も非もすべて夢の中のことのように思われる。自分は山の庵に住んでいる身であるが、夜半に物思いにふけっていると、五月雨が物寂しく窓に降り注いで、いつまでも眠りに就くことができない。

初冬しよとうの作さく 劉景文りゆうけいぶんに贈おくる

蘇そ軾しよく
(北宋一〇三六—一一〇二)

荷かは尽つきて已すでに雨あめを撃きぐるの蓋がい無なく
 一年いちねんの好景こうけい君きみ須すべからく記きすべし
 正まさに是これ橙とう黄橘こうきつ緑りよくの時とき
 菊きくは残ざんして猶なお霜しもに傲おごるの枝えだ有あり

【本文】

初冬作 贈劉景文

荷盡已無撃雨蓋
 一年好景君須記
 菊殘猶有傲霜枝
 正是橙黄橘綠時

【通釈】 はすはすっかり枯れ尽きて、もはや雨を受けるかさのような葉も無くなった。そして菊の花はその美しさを失ったけれども、なお霜にもまけない勢いを示している。この一年の中で最もよい景色の時を、君はよく覚えておきたまえ。それはだいたいの実が黄色になり、橘の実が緑色になるこの初冬の時期なのだ。

江こう月げつ亀田かめだ鵬ほう斎さい
(宝暦二年、文政九年)
(一七五二—一八二六)満まん江こうの明めい月げつ 満まん天てんの秋あき一いっ色しよく 江こう天てん万ばん里りの流ながれ半はん夜や酒さけ醒さむれば 人ひと見みえず霜そう風ふう 蕭しょう瑟しつたり 荻てき蘆ろ洲しゅう

【本文】

江月

満江明月満天秋

一色江天萬里流

半夜酒醒人不見

霜風蕭瑟荻蘆洲

【通釈】

明月は川の流れをくまなく照し、秋気は天に満ちて澄みわたり、空と見分けのつかぬ色の大河の水は、遠く離れて天に接しているようである。夜半に酒の酔いも醒めて気付いて見ると、あたりに人影一つ見えない。ただ秋風がそよそよと荻や蘆のしげる洲を吹いているのみである。

山中問答

李

白はく
(盛唐、七〇一、七六二)

余よに問とう何なんの意いあつて碧山へきざんに栖すむと

笑わろうて答こたえず心こころ自おのずから閑かんなり

桃花とうか流水りゅうすい杳然ようぜんとして去さる

別べつに天地てんちの人間じんかんに非あらざる有あり

〔本文〕

山中問答

問レ余何意栖碧山

笑而不答心自閑

桃花流水杳然去

別有天地非人間

〔通釈〕 人はわたしにどういうつもりでこのようなみどりの山奥に住むのかとたずねる。わたしは笑つて答えない。他の人が何と思おうと私の心はゆったりとのどかである。見給え、美しい桃の花びらが清らかに流れる水に浮かんで、はるか遠くに流れ去っていくのを。このような様子を見るにつけ、俗世間を離れた別の天地があるということを感じるのである。

菊きく花か白はく居きよ易い

(中唐、七七二、八四六)

一いち夜や新しん霜そう瓦かわらに著ついて軽かろし

芭蕉ばしやうは新あらたに折おれて敗荷はいかは傾かたむく

寒かんに耐たうるは唯ただ東籬とうりの菊きくのみ有ありて

金粟きんぞくの花はなは開ひらいて曉更あかつきさらに清きよし

〔本文〕

菊 花

一夜新霜著レ瓦輕

芭蕉新折敗荷傾

耐レ寒唯有ニ東籬菊

金粟花開曉更清

〔通釈〕

一夜、はじめておりた霜が、うつすらとかわらの上にあり、芭蕉も折れて、枯れた蓮も傾いている。こんな秋の気配の中で、寒さに耐えているのは、ただ東のかきねの菊の花だけである。黄色い花をつけている菊は、ただでさえ清らかな明け方を、いつそう清らかなものにしていく。

月よみの
つきよみの

月よみの
光をまちて
かへりませ

山路は栗の
光をまちて
かがの多きに

月よみの
光をまちて
かへりませ

山路は栗の
かがの多きに

良^{りょう}

寛^{かん}

晩秋舟行
ばんしゅうしゅうこう

市河寛齋
いちかわかんさい
(寛延二年(一七四九)～文政三年(一八二〇年))

晴江秋静
せいこうあきしず

かにして 遠く天を涵す
とおてんをひたす

岸を夾みて
きしをさしはさみて

霜楓
そうふう

晩煙に焼く
ばんえんにやく

漁唱樵歌
ぎょしょうしょうか

都て去り尽くし
すべさつさつき

詩を思いて
しをおもいて

人は在り夕陽の船に
ひとあせきやうのふねに

【本文】

晩秋舟行

晴江秋静 遠涵天
漁唱樵歌 都去盡

夾岸霜楓 燒晚煙
思詩人在夕陽船

【通釈】 晴れわたった大空の下、大川は、清涼の秋の気をたたえ、青々とした水を、遠く天にまで届かせて大空をひたしている。岸を夾んで茂る楓は霜に紅葉し、日暮れともなれば、夕日の光を受けて夕もやの中にも燃えるばかりの美しさである。やがて漁夫のうたう歌も、きこりのうたう声も、すべて夕やみと共に尽きて、静寂があたりをとぎす中に、詩に心をひかれた人ひとり、夕陽に赤く染った船に在って詩作に心をこめるのである。

後夜ごや仏ぶつ法ぼう僧そう鳥ちようを聞きく

空くう

海かい
(宝亀五年承和二年
七七四八三五)

閑かん林りん独どく坐ざす
草そう堂どうのあかつき曉あかつき
三さん宝ぼうのこえ声こえは一いっ鳥ちように聞きく

一いっ鳥ちよう声こえ有あり
人ひと心こころ有あり
声せい心しん
雲うん水すい俱ともに了りよう了りよう

【本文】

後夜聞き佛法僧鳥ぶつぽうそうちよう

閑林獨坐草堂曉

三寶之聲聞き一鳥いっちよう

一鳥有あ聲人有あ心

聲心雲水俱とも了りよう了りよう

【通釈】

山中の静まり返った夜明けの草堂に独り坐っていると、どこからともなくこのはずくの「仏法僧」と鳴く声が聞こえてくる。その声は仏の迦陵頻伽かりんげの声もかくばかりと思われるのである。そして、鳥の声と、人の心が感應し、雲水にとけあつて、永久不変の真理を看得されるのである。

半はん夜や

良りょう

寛かん

(宝曆七年、天保二年)
一七五七、一八三一

首こうべを回めぐらせば
五十ご有じゅう余ゆう年ねん

人じん間かんの是ぜ非ひは一いち夢むの中うち

山房さんぼう五ご月がつ黄こう梅ばいの雨あめ

半はん夜や蕭しょう蕭しょう虚きよ窓そうに灑そそぐ

【本文】

半夜

回首五十有餘年

人間是非一夢中

山房五月黄梅雨

半夜蕭蕭灑灑虚窓

【通釈】 振り返って見れば私の人生も既に五十余年が過ぎてしまった。過ぎ去った自分も含めた人間社会のことは、是も非もすべて夢の中のことのように思われる。自分は山の庵に住んでいる身であるが、夜半に物思いにふけっていると、五月雨が物寂しく窓に降り注いで、いつまでも眠りに就くことができない。

直すぐなるも

茶

直なるも 曲がるも同じ 世の中ぞ

蓬よもぎはよもぎ 麻づれはあさ連

蓬はよもぎ 麻はあさ連

【読み方】 すぐなるも まがるもおなじ よのなかぞ よもぎはよもぎ あさはあさづれ

【語釈】 ○直なるも—真つ直ぐなもの。○あさ連—あさ同士。

【通釈】 真つ直ぐなものも曲つたものも同じ世の中にあつてみな必要なものとして存在する。

蓬はよもぎであつて麻はあさである。

【参考】 諺「麻の中の蓬」とは、茎の曲がりくねる蓬でも麻畑の中では真つ直ぐ育つことから、

世の中は

蓼りょう太た

世の中は世の中は

三日見ぬ間に

桜かな

三日見ぬ間に

桜かな

【読み方】よのなかは みつかみぬまに さくらかな

【季語】「桜」晩春。

【語釈】○桜―明治期に新しく栽培されたソメイヨシノ以外の桜を指す。

【通釈】三日ほど家にこもりきって、久しぶりに外に出てみると、世の中はすっかり桜の花盛りになっていたことよ。

【参考】寛保二年（一七四二）作。「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」（古今和歌集）の在原業平むらさきの和歌を踏まえつつ「三日見ぬ間に」一斉に開き咲いた桜の本意を言い取った作。

【作者】大島蓼太。享保三年（一七一八）

天明七年（一七八七）。

【出典】蓼太句集

花の雲

芭蕉

花の雲

鐘は上野か

浅草か

鐘は上野か

浅草か

【読み方】はなのくも かねはうえのか あさ

くさか

【季語】「花の雲」晩春。

【語釈】○鐘—上野の寛永寺の鐘と浅草の金

龍山浅草寺の鐘。

【通釈】わが草庵から花の名所上野や浅草の

あたりの桜花がまるで雲のように遠く見える。はるかに聞こえる鐘の音は上野だろうか、浅草だろうか。

【参考】「草庵」と前書。花見の雑踏の中で

はなく、静かな草庵での作である。花と鐘の取り合わせは漢詩的な発想に拠るもの。当時、上野・浅草は花の名所だった。貞享四年（一六八七）作。

【作者】前出。

【出典】続虚栗

なでしこ

西さい行ぎょう法ほう師し

かきわけて
折れば
露こそ
こぼれけれ

浅茅あさぢらにまじる
なでしこの花

かきわけて
折れば
露こそ
こぼれけれ

浅茅にまじる
なでしこの花

赤馬あかまが関せきを過すぐ

伊形いがた靈れい雨う
(延享二年〜天明七年
一七四五〜一七八七)

長風ちやうふう浪なみを破やぶつて一いっばん帆かえ還る

碧海へきかい遙はるかに環めぐる赤馬あかまが関せき

三十六灘さんじゅうろくだん行ゆくくゆく尽つきんと欲ほつす

天辺てんべん始はじめて見みる鎮西ちんせいの山やま

〔本文〕

過す赤馬關あかま

長風破やぶ浪なみ一いっばん帆かえ還る

碧海遙環めぐ赤馬關あかま

三十六灘行ゆく欲ほつ盡つきん

天邊始見はじ鎮西山ちんせい

〔通釈〕

はるか彼方から吹きよせる風を受けて、わが帆船は万里の波を破つて帰るのである。瀬戸内海の海原を、多くの岬や島々をめぐって、はるばる赤馬が関へと航路を取る。多くの早瀬などの難所を乗りきり、やがて波の静かなところへ出ようとすする頃、空の彼方に始めて、故郷九州の山々が見えるのであった。

筑前城下の作ちくぜんじょうか

広瀬淡窓ひろせ たんそう
(天明二年、安政三年、一七八二、一八五六)

伏敵門頭浪天を拍ふく てきもんとう なみ てんをう

当時の築石自ずから依然とうじのちくせきおのいぜん

元兵海に没す蹤猶在げんべいうみにほつすあとなおあ

神后韓を征す事久しく伝じんこうかんをせいすことひさつと

城郭影は浮ぶ春浦の月じょうかくかげはうかぶしゅんぼのつき

絃歌声は隠る暮洲の煙げんかこえはかくるぼしゅうのけむり

昇平象有り君看取しやうへいしやうあきみかんしゆ

処処の垂楊に賈船を繫しよしよのすいようこせんをつな

海うみにうか泛ぶ

王おう

陽明ようめい

(明、一四七二、一五二八)

險けん夷い原もと胸きょう中ちゆうにとどこ滞おらず

何なんぞこと異ことならん浮ふう雲うんのたいくう太くう空を過すぐるに

夜よはしず静かなり海かい濤とう三さん万まん里り

月げつ明めいにしゃく錫とをてん飛ふうばくしてくだ天を風を下る

【本文】

泛レ海

險夷原不レ滞二胸中一

何異浮雲過二太空一

夜靜海濤三萬里

月明飛錫下二天風一

【通釈】

海路が安全であるとかないといったことはもともと心の中にこだわることではない。そのよ
うなことは大空に浮かぶ雲が、風に流されていくのと同じである。夜の波静かな三万里の海上に船を
乗り出し、月明りの下、あたかも錫杖を飛ばして天空をゆくかのように海を渡ろうというのである。

春の海

春の海

ひねもすのたり

のたりかな

ひねもすのたり

のたりかな

燕

村

【読み方】はるのうみ ひねもす のたりのた

りかな

【季語】「春の海」兼三春。

【語釈】○終日―一日中。ひもすがら。「ひ

めもす」とも。

【通釈】沖には春霞がたなびき、明るく穏や

かな空と海とが広がり、春の光の中

で海は、一日中もの憂げに、のたり

のたりと寄せては返している。

【参考】宝暦十二年（一七六二）以前の作。

『俳諧古選』（宝暦十三年刊）に初出

して以来世評の高い代表作の一。風

いで緩やかな波を表現した「のたり

のたり」の擬態語が生命である。

【作者】与謝蕪村。享保元年（一七一六）

天明三年（一七八三）。

【出典】俳諧古選

蛤はまご

の

蛤

の

ふたみに別れ

行く秋ぞ

ふたみに別れ

行く秋ぞ

芭蕉

【読み方】 はまぐりの ふたみにわかれ ゆく

あきぞ

【季語】 「行く秋」 晩秋。

【語釈】 ○蛤の—伊勢国二見の名産に因み、

枕詞的に用いた。○ふたみ—伊勢の歌枕「二見」の地名に、蛤の蓋ふたと身の意を掛ける。

【通釈】 蛤の離れがたい蓋と身とが別れるよ

うに、名残を惜しみつつ人々と別れ二見に行く時が来た。折りから秋もまさに行こうとしている。

【参考】 『おくのほそ道』の最終章大垣で、見

送りの人々への挨拶の吟。西行の「今ぞ知る二見の浦の蛤を貝合せとて覆ふなりけり」の歌をふまえる。

【作者】 前出。

【出典】 おくのほそ道

潮頭ちようとう

徳富蘇峰とくとみそほほう
(文久三年、昭和三十三年、一八六三、一九五七)

太平洋外水滔滔

巨浪巖を嚙んで怒号を縦にす

一段の清愁人の識る莫し

芙蓉峰上月輪高し

〔本文〕

潮頭

太平洋外水滔滔

巨浪嚙巖縦に怒號

一段清愁莫人識

芙蓉峯上月輪高

〔通釈〕 太平洋は果てしなく広がり、岩に砕ける大波は怒り叫ぶような声を上げています。さて、わが心の清らかな憂いを人は知らないが、富士山の上には満月が高く清らかに輝き（我が心までも）照らしている。

太平洋

安達漢城(元治元年、昭和二十三年
一八六四、一九四八)

日は浪より昇りて又波に沈む

海水洋洋として紫色多し

鵬影飛ばず鯤躍らず

碧空万里白雲過ぐ

【本文】 太平洋

日昇於浪又沈波

海水洋洋紫色多

鵬影不飛鯤不躍

碧空万里白雲過

【通釈】 太平洋を航海していると陸も島も見えず、見渡すかぎり海である。朝、太陽は波の間から上り、夕方また波の間に沈んでいく。広々とした海の水は豊かで広々としており、紫色がかっている。大鳥の飛ぶ影もなく、大魚の躍ることもなく、平穏な航海である。ふと見上げた青空には、ひとひらの雲が浮かんでゆつくりと静かに流れてゆく。

「恋衣」より海恋し

海恋し

潮の遠鳴り

かぞへては

少女となりし

父母の家

海恋し

潮の遠鳴り

かぞへては

少女となりし

父母の家

与謝野晶子

亀山きざん 営中えいちゆう の作さく

大久保利通おおくぼとしみち
(天保元年〜明治十一年)
(一八三〇〜一八七八)

たいかいなみなな つきえいて
 大海波鳴うな 月営つきえい を照てらす

たれしらんばんりえんせいじよう
 誰たれ 知しらん 万ばん里り 遠えん 征せい の情じよう

こみんいまむす いえかえ ゆめ
 孤眠未こみん だ結いまばず 家いえに還かえるの夢ゆめ

はるき ちゆうしょうらつ ばこえ
 遙はるかに聴きく 中宵喇叭ちゆうしょうらつ の声こえ

〔本文〕

亀山 営中 作

大海波鳴 月照 営

誰知 萬里 遠征 情

孤眠未 結還 家夢

遙聽 中宵 喇叭 聲

〔通釈〕 亀山の前面に広がる大海からは波の音が響き、月は白々とこの陣営を照らし出している。このものの悲しい情景に接し、遠く故郷を離れ、遠征して切ない気持ちに襲われぬ者があるか。一人横になり、家に帰る夢など見ないうちに、遠くから夜半を告げるラツバの音が聞こえてきた。

九く
月がつ
尽じん

九く
月がつ
尽じん

遥はる
かに
能の
登と
の

岬みさき
かな

遥はる
かに
能の
登と
の

岬みさき
かな

暁きょう

台たい

【読み方】くがつじん はるかにのとの みさ

きかな

【季語】

「九月尽」晩秋。陰曆九月の末日。

【語釈】

○能登の岬―石川県の能登半島。

【通釈】

九月の終わり、秋ももう今日一日で

いってしまふのだ。北陸の海辺に立

つと、はるかな海の先に、能登の岬

がのびている。

【参考】

暁台最晩年の寛政三年（一七九二）

の北陸旅行の時の作であろう。冬を

迎えようとする北の海は、しだいに

荒れてくる。しかし空はまだ秋の名

残をとどめ、能登の岬がはつきりと

遠望されるのである。

【作者】

加藤暁台。享保十七年（一七三二）

寛政四年（一七九二）。

【出典】

暁台句集

海に出て

誓せい子し

海

に出て

『』

木こ枯がら帰しる

ところなし

木枯こ帰がらる

ところなし

【読み方】うみにでて こがらしかえる ところなし

【季語】「木枯」初冬。

【通釈】野山をはげしく吹きあらしていた木枯らしは、陸を離れ、海の上を吹き渡って行き、もう帰ってくるころはない。

【参考】昭和十九年の作。木枯を擬人化して詠んだ句。誓子はこの句について「木枯は陸を離れ、海の彼方を指して行ってしまった。木枯は行ったきりで、もはや還って来ることはない。その木枯はかの片道特攻隊に劣らぬくらい哀れ」（『自作案内』）と記す。

【作者】山口誓子。明治三十四年（一九〇一）〜平成六年（一九九四）。

【出典】遠星

壇だんの浦うら夜泊やはく木き下した犀さい潭たん
(文化二年、慶応三年、
一八〇五、一八六七)

篷ほう窓そう月つき落おちて
眠ねむりを成なさず

壇だんの浦うらの春しゅん風ふう五ご夜やの船ふね

漁ぎよ笛てき一いっ声せい恨うらみを吹ふいて去さる

養よう和わ陵りょう下か水みず煙けむりの如ごとし

【本文】

壇浦夜泊

篷窓月落不成眠

壇浦春風五夜船

漁笛一聲吹恨去

養和陵下水如烟

【通釈】 今宵は平家一門の沈んだ壇の浦に船泊りしたが、窓を照らしていた月も沈んでしまったのになかなか眠れない。暖かい春風が吹き、夜明け近くなった。おりから漁笛が聞こえてきたが、その音は安徳帝や平家一門の恨みをこめているようであり、養和の御陵の下の海面はかすんで煙がたちこめているようである。

はこねにまうづとて

源 みなもと

実 さね

朝 とも

箱根路を

わが越えくれば

伊豆の海や

沖の小島に

波の寄るみゆ

箱根路を

わが越えくれば

伊豆の海や

沖の小島に

波の寄るみゆ

海路うみじの眺望ちやうぼうを

浪なみのう上へに
 『 ううつる夕ゆふ日ひの
 影かげはあれど』

浪なみのう上へに
 『 ううつる夕ゆふ日ひの
 影かげはあれど』

遠とほつ小こ島しまは
 色いろ暮くれれにけり』

京きやう 極ごく 為ため 兼かね

じんきがんねんこうし
 神龜元年甲子の冬十月五日、紀伊國に幸す時に、
 やまべのすくねあかひと
 山部宿禰赤人の作る歌

やま
 部
 赤
 人

若の浦に

潮満ち来れば

瀉をなみ

葦辺をさして

鶴鳴き渡る

若の浦に

潮満ち来れば

瀉をなみ

葦辺をさして

鶴鳴き渡る

海^{うみ}海[△]なら[—]ず[—]
『』た[△]た[△]へ^エる[—]水[△]の[—]底[△]ま[—]で[—]に[—]
『』菅^{すが}
原^{はら}
道^{みち}
真^{まこと}海[△]なら[—]ず[—]
『』た[△]た[△]へ[—]る[—]水[△]の[—]底[△]ま[—]で[—]に[—]
『』清[△]き[△]心[△]は[—]月[△]ぞ[△]て[△]ら[△]さ[△]む[—]
『』清[△]き[△]心[△]は[—]月[△]ぞ[△]て[△]ら[△]さ[△]む[—]
『』

天草洋に泊す あまくさなだ はく

頼 らい

山陽 さんよう
(安永九年、天保三年、一七八〇、一八三三)

雲 くも
 か
 山 やま
 か
 『 』
 呉 ご
 か
 越 えつ
 か

水 すい
 天 てん
 『 』
 髻 ほう
 髯 ふつ
 青 せい
 一 いっ
 髪 ばつ

万 ばん
 里 り
 舟 ふね
 を
 泊 はく
 す
 『 』
 天草 あまくさ
 の
 洋 なだ

煙 けむり
 『 』
 篷窓 ほうそう
 に
 横 よこ
 たわりて
 日漸 ひようや
 没 ぼつ
 す

瞥 べつ
 見 けん
 す
 大魚 たいぎよ
 の
 波間 はかん
 に
 跳 おど
 るを

太白 たいはく
 『 』
 船 ふね
 に
 当 あ
 たつて
 明月 めいつき
 に
 似 に
 たり

磯浜望洋樓に登る

三島中洲（天保元年〜大正八年）

夜よる登のぼるひやくしやく百尺かいわん海灣ろうの樓
 慨然がいぜん忽たちまちはっ発す遠征えんせいの志こころざし
 月つきは白しろし東洋とうよう万里ばんりの秋あき
 極目きよくもく何いずれの辺へんか是これ米州べいしゅう

【本文】

登磯濱望洋樓

夜登百尺海灣樓

極目何邊是米州

慨然忽發遠征志

月白東洋萬里秋

【通釈】夜、百尺もあろうという海浜の高いこの樓にのぼってみると、見わたすかぎり大海原でどのあたりが話に聞くアメリカ大陸になるのだろうか、見当もつかない。じっと見ていると、その海のかなたに行ってみたいという思いが、心の底からわき上ってくる。折しも秋の月は冴え、はてしなく広がるこの東海の波濤を白く照しているのである。

題だいしらず

世よの中なかは
 なにかつなねなる

あすあか川か
 ききのふののふのちちぞ

世よの中なかは
 なにかつなねなる

あすあか川か
 ききのふののふのちちぞ

詠よみ人びと知しらず

けけふふはは瀬せにになる

けけふふはは瀬せにになる

楓橋夜泊
ふうきょうやばく

張
ちやう

繼
けい
(中唐七五六頃在世)

102

月落^{つきお}ち^お烏啼^{からすな}いて^な霜^{しも}天^{てん}に^に満^みつ
 姑蘇^{こそ}城^{じやう}外^{がい}の^の寒^{かん}山^{さん}寺^じ
 夜^や半^{はん}の^の鐘^{しやう}声^{せい}客^{かく}船^{せん}に^に到^{いた}る
 江^{かう}楓^{ふう}漁^{ぎよ}火^か愁^{しゆう}眠^{みん}に^に対^{たい}す

【本文】

楓橋夜泊

月落烏啼霜滿天

江楓漁火對愁眠

姑蘇城外寒山寺

夜半鐘聲到客船

【通釈】 月はもう西に沈み、烏の鳴く声が聞こえ、空には霜のおりる気配が満ちあふれて、寒さがきびしい。川岸の楓や、漁り火のあかりが、点々と、寝そびれた目にうつる。なかなか寝つかれずにいると姑蘇の町はずれの寒山寺からであろうか、夜半を告げる鐘の音がこの船まで聞こえてきた。

江こう月げつ亀田かめだ鵬ほう斎さい
(宝暦二年、文政九年
一七五二—一八二六)満まん江こうのの明めい月げつ 満まん天てんのの秋あき一いっ色しよく 江こう天てん万ばん里りのの流ながれ半はん夜や酒さけ醒さむむれば 人ひと見みええず霜そう風ふう 蕭しょう瑟しつ 荻てき蘆ろ洲しゅう

【本文】

江 月

満江明月満天秋

一色江天万里流

半夜酒醒人不見

霜風蕭瑟荻蘆洲

【通釈】

明月は川の流れをくまなく照し、秋気は天に満ちて澄みわたり、空と見分けのつかぬ色の大河の水は、遠く離れて天に接しているようである。夜半に酒の酔いも醒めて気付いて見ると、あたりに人影一つ見えない。ただ秋風がそよそよと荻や蘆のしげる洲を吹いているのみである。

涼州詞りょうしゅうし王おう之渙し かん(盛唐 六八八? ~ 七四二?)

黄こう河が遠とおく上のほる

白はく雲うんの間かん

一いっ片べんの

孤こ城じょう

万ばん仞じんの

山やま

羌きやう笛てき何なんぞ須もちいん

楊よう柳りゆうを怨うらむを

春しゅん光こう

度わた

玉ぎよく

門もん関かん

【本文】

涼州詞

黄河遠上白雲間

一片孤城萬仞山

羌笛何須怨楊柳

春光不度玉門關

【通釈】 はるかに続く黄河を、白雲のたちこめるあたりへとさかのぼってゆくと、万仞もの高さにそびえる山の上に、ぼつんと一つ城塞が見える。ああ、寂しい音色の羌笛で、別れの曲の「折楊柳」を吹いて寂しさををつのらせる必要がどこにあるのだろう。ただでさえ、春の光が玉門関をこえてこの地にやってくるということはないのだから。

江こう月げつ亀田かめだ鵬ほう斎さい
(宝暦二年、文政九年)
(一七五二—一八二六)満江まんこうの明月めいげつ 満天まんてんの秋あき一色いっしょく 江天こうてん万里ばんりの流なが半はん夜や酒醒さけさ 人見ひとみえず霜風そうふう 蕭瑟しょうしつ 荻蘆てきろ洲しゅう

【本文】

江月

満江明月満天秋

一色江天万里流

半夜酒醒人不見

霜風蕭瑟荻蘆洲

【通釈】

明月は川の流れをくまなく照し、秋気は天に満ちて澄みわたり、空と見分けのつかぬ色の大河の水は、遠く離れて天に接しているようである。夜半に酒の酔いも醒めて気付いて見ると、あたりに人影一つ見えない。ただ秋風がそよそよと荻や蘆のしげる洲を吹いているのみである。

漫 述

佐久間象山（文化八年—一元治元年）
（一八一一—一八六四）

謗そしる者ものは 汝なんじの謗そしるに任まかす
 天てん公こう本もと 我われを 知しる

嗤わろう者ものは 汝なんじの嗤わろうに任まかす
 他た人にんの 知しるを 覓もとめず

【本文】

漫 述

謗者任汝謗

天公本知我

嗤者任汝嗤

不覓他人知

【通釈】 謗る者はぞんぶんに謗るがよい。あざわらう者は思いきりあざわらうがよい。謗るも嗤うも君たちの勝手にさせておこう。天の神だけは、わたしの私心のないことを知っている筈であるから、他人に理解してもらおうなどとは思わないのである。

汪淪おうりんに贈おくる

李り

白はく

李白りはくふね舟ふねに乘のりて將まさに行ゆかんと欲ほつす
 桃花とうか潭たんの水みずは深ふかさ千せん尺せき及およばず汪淪おうりんが我われを送おくるの情こころに
 忽たちまち聞きく岸がん上じょう踏とう歌かの聲こえ

【参考】 送られる人が吟じる詩。

【語釈】 ○汪淪—桃花潭の村人で、李白がここに滞在中酒を贈った人。○踏歌—人を送る時、足をふみ鳴らして歌をうたう。○桃花潭—安徽省涇県西南の景勝の地。淵の深さはどれほどかわからないという。汪淪の心に比す。

【作者】 (唐) (七〇一〜七六二) 蜀の人。酒を好んで酒仙と称す。奔放な性格だが詩にすぐれ、杜甫と並称され詩仙と呼ぶ。

峨眉山月の歌 がびさんげつ うた

李 り

白 はく
(七盛唐一七六二)

峨眉山月半輪秋
 影入平羌江水流
 夜清溪を發して三峽に向かう
 君を思えども見えず渝州を下る
よるせいけい はつさんきょう さんきょうむ 君を思えども見えず渝州を下る

【本文】

峨眉山月歌

峨眉山月半輪秋

影入平羌江水流

夜發清溪向三峽

思君不見下渝州

【通釈】 峨眉山に、半輪の月がかかっている。その月の光は、平羌の江水を明るく映し出し、水は静かに流れてゆく。私はこの夜清溪を出発して三峽に向かったのであったが、ここに来てはじめて月を見ることができたのである。このあたり、山がつらなり特別の時刻でなければ、太陽や月の見えないところというが、舟が下るにつれて、やがて半輪の月も隠れてしまつて、そのまま空しく渝州を通り過ぎたのであった。

金州城下の作きんしゅうじょうか

乃木希典のぎまれすけ
(嘉永二年—一八四九—)
(大正元年—一九一二年—)

征馬前せいばすず 山川草木さんせんそうもく 転うた 荒涼こうりょう 十里風腥じゅうりかぜなまぐさ 新戰場しんせんじょう
 人語ひとかた らず 金州城外斜陽きんしゅうじょうがいしゃよう に立つ

【本文】

金州城下作

山川草木轉荒涼

十里風腥新戰場

征馬不前人不語

金州城外立斜陽

【通釈】 山も川も草も木も、すっかり荒れ果ててしまっている。戦いのあったばかりのこの広い戦場には、どこもかしこも、血なまぐさい風が吹いている。あまりのわびしさに軍馬も進もうとはせず、また、われ人とともにことばも無く、金州城外の夕日の中に、万感の思いで立ちつくすのである。

武野の晴月

林羅山（天正十一年）
（一五八三）
 明曆三年
（一六五七）

武陵の秋色月嬋娟
 曠野平原晴快然
 青青轆轤破し轍迹無く
 一輪千里草天に連なる

【本文】

武野晴月

武陵秋色月嬋娟

曠野平原晴快然

轆轤破青青無轍迹

一輪千里草連天

【通釈】 武蔵野の原野の秋の景色はまことにすばらしい。月があでやかに美しくかがやきわたり、野は遠く平らかにどこまでも広がって、まことに気持ちがいい。それは草のみどりをどこまでも敷きつらねて車の轍の迹もなく、車といえばただひとつ、まんまるい月が、空高く千里のかなたに輝き、その光をうけてこの草原は遠い大空と、ひとつづきになっているのである。

事ことに感かんず

于う

瀆ふん
(晩唐、生没年不詳)

花はな開ひらけば
蝶ちょう枝えだに満みつ

花はな謝しやすれば
蝶ちょう還また稀まれなり

惟ただ旧きゆう巢そうの
燕つばめ有あり

主しゆ人じん貧ますし
きも亦また帰かえる

【本文】

感かん事じ

花開蝶満枝
惟有ニ舊巢燕

花謝蝶還稀
主人貧亦歸

【通釈】 花が開けば蝶が群がり集まり、花が散ってしまえば蝶は飛んでくることすら稀である。だが燕だけは、主人が貧しくなったにもかかわらず、去年の古巢を忘れずに尋ねてくる。

さんせき うた
三夕の歌「見わたせば」

かじ
藤原 定家
ちの
さだ
いえ

見[▽]わたせば[┌]
花[△]も紅^{もみじ}葉^もも
な[▽]かりけり[┐]

浦[△]の^一苦^{とま}屋^やの^一秋[△]の[△]夕[△]暮[┐]

見[▽]わたせば[┌]
花[▽]も紅[▽]葉[▽]も
な[▽]かりけり[┐]

浦[△]の[△]苦[△]屋[△]の[△]秋[△]の[△]夕[△]暮[┐]

詞書「西行法師すすめて百首歌よませ侍りけるに」

靈りょう山ぜん

徳とく富とみ蘇そ峰ほう
(文久三年、昭和三十三年、
一八六三、一九五七)

三さん十じゅう六ろっ峰ほう雲くも漠ばく漠ばく

洛らく中ちゅう洛らく外がい雨あめ紛ふん紛ふん

破は笠とう短たん褐かつ来き来きたたつて涙なみだを揮ふるう

秋あきは冷ひややかなり
 殉じゆん難なん烈士れつしの墳はか

【本文】

靈山

三十六峯雲漠漠

洛中洛外雨紛紛

破笠短褐來揮淚

秋冷殉難烈士墳

【通釈】 京都東山の三十六峰は、一面に雲ですっかり掩われ、京都の町一帯は雨にけむっている。自分はいちおうして破れ傘に短い粗末なみなりで、靈山にある維新の際に殉難した烈士の墓に参拝しているが、おりからの冷やかな秋に、烈士をいたむ思いも一層つよくなってきて、涙の流れるのをとめることができなかった。

勸かん学がく

陶とう

潜せん
(晋、三六五、四二七)

盛せい年ねん重かさねて来きたらず

一いち日じつ再ふたび晨あしたなり難がたし

時ときに及およんで当まさに勉べん励れいすべし

歳さい月げつは人ひとを待またず

〔本文〕

勸学

盛年不重来
及レ時當ニ勉励

一日難再晨
歲月不待人

〔通釈〕 若い血氣盛んな時代は、一生のうちに二度とは来ない。それはちようど一日のうちに朝が二度来ないのと同じようなもので、勉強すべき時代には大いに勉強しなくてはいけない。時は待っていないのである。

武野の晴月

林羅山（天正十一年）
（一五八三）
（明曆三年）
（一六五七）

武^ぶ陵^{りょう}の秋^{しゅう}色^{しよく}月^{つき}嬋^{せん}娟^{けん}
 青^{せい}青^{せい}を輾^{てん}破^ぱし輒^{てつ}迹^{せき}無^なく
 曠^{こう}野^や平^{へい}原^{げん}晴^はれて快^{かい}然^{ぜん}
 一^{いち}輪^{りん}千^{せん}里^り草^{くさ}天^{てん}に連^{つら}なる

【本文】

武野晴月

武陵秋色月嬋娟

曠野平原晴快然

輾破青青無輒迹

一輪千里草連天

【通釈】 武蔵野の原野の秋の景色はまことにすばらしい。月があでやかに美しくかがやきわたり、野は遠く平らかにどこまでも広がって、まことに気持ちがいい。それは草のみどりをどこまでも敷きつらねて車の轍の迹もなく、車といえばただひとつ、まんまるい月が、空高く千里のかなたに輝き、その光をうけてこの草原は遠い大空と、ひとつづきになっているのである。

半^{はん}夜^や

良^{りょう}

寛^{かん}

(宝曆七年、天保二年)
(一七五七、一八三一)

首^{こうべ}を回^{めぐ}らせば
五十^ご有^{じゅう}余^{ゆう}年^{ねん}

人^{じん}間^{かん}の是^ぜ非^ひは一^{いち}夢^むの中^{うち}

山^{さん}房^{ぼう}五^ご月^{がつ}黄^{こう}梅^{ばい}の雨^{あめ}

半^{はん}夜^や蕭^{しょう}蕭^{しょう}虚^{きよ}窓^{そう}に灑^{そそ}ぐ

〔本文〕

半 夜

回^レ首五十有餘年

人間是非一夢中

山房五月黄梅雨

半夜蕭蕭灑^二虚窓^一

【通釈】 くり返つて見れば私の人生も既に五十余年が過ぎてしまった。過ぎ去つた自分も含めた人間社会のことは、是も非もすべて夢の中のことのように思われる。自分は山の庵に住んでいる身であるが、夜半に物思いにふけっていると、五月雨が物寂しく窓に降り注いで、いつまでも眠りに就くことができない。

月夜三又江に舟を泛ぶ

高野蘭亭(宝永元年、宝曆七年)

三又中断す大江の秋

明月新たに懸る万里の流れ

碧天に向かつて玉笛を吹かんと欲すれば

浮雲一片扁舟に落つ

【本文】

月夜三又江泛舟

三又中断大江秋

明月新懸万里流

欲向碧天吹玉笛

浮雲一片落扁舟

【通釈】 今戸川が隅田川の流れを断つように注ぐ、この三又のあたり、秋の夜空には明るい月がかかったばかりで、万里の流れを照らし出している。月の光もすみわたった深みどり色の夜空に向かつて笛を吹こうとすると、ひとひらの白い浮雲がこの小舟に落ちてきたかのように私の目に映ったのである。

山中問答

李

白はく（盛唐、七〇一―七六二）

余よに問とう何なんの意いあつて碧山へきざんに栖すむと

笑わろうて答こたえず心こころ自おのずから閑かんなり

桃花とうか流水りゅうすい杳然ようぜんとして去さる

別べつに天地てんちの人間じんかんに非あらざる有あり

〔本文〕

山中問答

問レ余何意栖碧山

笑而不答心自閑

桃花流水杳然去

別有天地非人間

〔通釈〕 人はわたしにどういうつもりでこのようなみどりの山奥に住むのかとたずねる。わたしは笑つて答えない。他の人が何と思おうと私の心はゆったりとのどかである。見給え、美しい桃の花びらが清らかに流れる水に浮かんで、はるか遠くに流れ去っていくのを。このような様子を見るにつけ、俗世間を離れた別の天地があるということを感じるのである。

河内路上かわちろじょう菊池溪琴きくちけい じん
(寛政十一年、明治十四年)
(一七九九、一八八一)

南朝なんちようの古木こぼく寒霏鎖かんびとざす

六百ろっびやくの春秋しゆんじゆう一夢いちむ非ひなり

幾度いくたび天てんに問とえども天答てんこたえず

金剛こんごう山下さんか暮ぼ雲うん帰かえる

【本文】

河内路上

南朝古木鎖寒霏

六百春秋一夢非

幾度問天天不答

金剛山下暮雲歸

【通釈】

南朝の頃からあったと思われる古木も淋しく夕もやに包まれている。思えば楠公が南朝に忠節を尽して戦ったときから、六百年の歳月が夢のように過ぎ去り、當時をしのぶべくもない。幾度か天に向つて尋ねたが天も當時を語らず、金剛山の楠公の史跡はいたずらに夕暮れの雲が去来しているのみである。

楓橋夜泊 ふうきょうやばく

張 ちやう

繼 けい
(中唐 七五六頃在世)

月落 つきお 烏啼 からすな 霜天 しもてん に満 み つ
 姑蘇 こそ 城外 じょうがい の 寒山 かんざん 寺 じ
 夜半 やはん の 鐘聲 しょうせい 客船 かくせん に到 いた る
 江楓 こうふう 漁火 ぎよか 愁眠 しゅうみん に對 たい す

【本文】

楓橋夜泊

月落烏啼霜滿天

江楓漁火對愁眠

姑蘇城外寒山寺

夜半鐘聲到客船

【通釈】 月はもう西に沈み、烏の鳴く声が聞こえ、空には霜のおりる気配が満ちあふれて、寒さがきびしい。川岸の楓や、漁り火のあかりが、点々と、寝そびれた目につる。なかなか寝つかれずにいると姑蘇の町はずれの寒山寺からであろうか、夜半を告げる鐘の音がこの船まで聞こえてきた。

酒を勧む

于 武陵(晩唐八四七年頃在世)

君に勧む 金屈卮
 花発いて 風雨多し

満酌 辞するを 須いず
 人生 別離 足る

【本文】

勸酒

勸君金屈卮
 花發多風雨

満酌不須辭
 人生足別離

【通釈】 花が爛漫として咲き乱れるこの時、大いに飲もうではないか。この黄金の酒杯になみなみと溢れるばかりに酒を注いで、君に差上げる。どうか辞退などせずに痛飲してくれ給え。この好機を、何で逃せようか。花が開けば、またたく間に風雨が散らしてしまふし、人の生涯には別離ばかりが多くて会うことはなかなかできない。さあ花の散らないうちに別れの時の来ないうちに、充分に歡を尽くしまし
 よう。

赤馬あかまが関せきを過すぐ

伊形いがた靈れい雨う（延享二年〜天明七年）
（一七四五〜一七八七）

長風ちやうふう浪なみを破やぶつて一いっばん帆かえ還る

碧海へきかい遙はるかに環めぐる赤馬あかまが関せき

三十六灘さんじゅうろくだん行ゆくくゆく尽つきんと欲ほつす

天辺てんべん始はじめて見みる鎮西ちんせいの山やま

〔本文〕

過す赤馬關

長風破やぶ浪一いっばん帆還

碧海遙環赤馬關

三十六灘行欲ほつ盡

天邊始見鎮西山

〔通釈〕

はるか彼方から吹きよせる風を受けて、わが帆船は万里の波を破つて帰るのである。瀬戸

内海の海原を、多くの岬や島々をめぐって、はるばる赤馬が関へと航路を取る。多くの早瀬などの難所を乗り越きり、やがて波の静かなところへ出ようとす頃、空の彼方に始めて、故郷九州の山々が見えるのであった。

白鳥は
しらとり

白鳥は

かなしからずや

空の青

うみのあをにも

白鳥は

かなしからずや

空の青

うみのあをにも

若山牧水
わかやまぼくすい

染まずただよふ

染まずただよふ

涼州詞

王

翰

(盛唐 六八七? 一七二六?)

葡萄の美酒 夜光の杯
 飲欲 琵琶馬上に催す
 醉うて沙場に臥す 君笑うこと莫かれ
 古来征战幾人か回る

【本文】

涼州詞

葡萄美酒夜光杯

欲飲琵琶馬上催

醉臥沙場君莫笑

古來征战幾人回

【通釈】 味のよいぶどう酒を、白玉のさかずきに酌んで飲むとすると、馬上で琵琶をかきながら興を添えるものがある。酔いつぶれて砂漠の戦場に倒れ伏しても、君よ、どうか笑わないでくれたまえ。昔から、戦いに出た者が、いったい幾人無事に帰れたであろうか。

静夜思

李

白はく
(盛唐一七六二)

牀しょう前ぜん月げつ光こうをを看みる
 頭こうべをを举あげてを山さん月げつをを望のぞみ

疑うたごうらくは是これ地上ちじょうの霜しもかと
 頭こうべをを低たれてを故郷こきょうをを思おもう

【本文】

静夜思

牀前看月光

舉頭望山月

疑是地上霜

低頭思故郷

【通釈】 寝台の前に、月の光が明るく白くさしこんでいる。余りの明るさに霜ではないかと疑ったがそれは月の光なのであった。頭を挙げてみれば、山上に明月が皎皎と輝いている。異郷にあって、このよ
うな美しい月を見ると、とりわけ故郷を思ふ情にひかされて感慨に沈んでしまうのである。

田原坂秘唱

まぼろし
幻のごと眼に浮ぶ

じゅうか
銃火の音に耳かせば

う
討たれし者も討つ者も

つき
月しろ淡く秋更けて

島田磬也

まる
丸に十字の旗哀し

ひふうせんり
悲風千里の田原坂

いま
今は眠れる塚の下

つゆ
露も涙の田原坂

鹿柴ろくさい王おう維い（盛唐、七〇一、七六一）

返 <small>へん</small>	空 <small>くう</small>
景 <small>けい</small>	山 <small>ざん</small>
深 <small>しん</small>	人 <small>ひと</small>
林 <small>りん</small>	人を見ず
復 <small>また</small>	但 <small>ただ</small>
青苔 <small>せい苔</small>	人語 <small>じんご</small>
上 <small>うへ</small>	響 <small>ひび</small>
照 <small>て</small>	聞 <small>き</small>

【本文】

鹿柴

空山不見人

但聞人語響

返景入深林

復照青苔上

【通釈】

ひっそりと静まりかえった山中では人の姿は見えない。だが、何処からともなく人の声が聞こえ、そのためにあたりの静けさがかえって増すようである。折から日は西に傾き、その光が林の奥深くまで射しこんで、木々の根元の青苔を美しく照らし出している。